

泣き出しました。横で寝ていた女の子が目覚まし、私を見つめていました。その愛らしい顔は、どこかで見覚えがあります。「あつ」びっくりしました。川岸に埋めてきた少女によく似ているのです。

「あなた、ほかに子どもさんはいませんか」と聞くと、女性は「実は、双子の姉の方が旅の途中で亡くなり、冷たくなるまで抱いていました。しかし、心を鬼にして川に捨てて来ました。主人も外地で死にました。私も死のうと思いましたが、この子を死なすことは出来ませんし」と泣かれます。

「安心して下さい。子どもさんは、私たちが葬って来ました」と告げると「ありがとうございます」と何度もお礼を言われました。

もう一人の女性は「逃避の途中、

我が手で子どもを死なせた。年若い母に一度会ってから、子どもの元へ行きます」と話され、私には慰める言葉もありませんでした。

やっと、博多港に着きました。さらに三日間、船内に足止めされました。

私は、子どもたちを内地まで連れて帰ったので、役目が終わったと思いました。北朝鮮を出発して二十一日目に、本土の土を踏みました。

